
花開くとき

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花開くとき

【Zコード】

N2121Z

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

彼と両想いだと思ってた…
でも…通り魔事件によって変わった。
彼の心はどこ?私の心はどこ?
私の心は…花。
でも…花は散ってしまった…

第一章

花…それははないもの…。

散つてしまえば、その花は終わつてしまつ。

そう、恋も同じ。

恋という花が散つた時、失恋という悲しさが、私たちを襲つ…

花開くとき

私の名前は宮野志保。

科学免許、医者免許を持っている、天才博士と言われている私。そんなの、ただの空論にしか過ぎない。まあ、免許を持っているのは本当。でも、天才なんて…この世にいない…と思つ。

最近、「と思う」が多くなつてきた。
しかも、天才だとか、すごいとか…。

そう、私から見て、天才、すごいが当てはまつている人がいる。
ただの憧れじゃない。

私の好きな人なのだ。

彼は、私をいつもいつも助けてくれた。

私が灰原哀だったとき、私を守つてくれた。
いつもいつも守られていた私。
だから、彼にひかれていた。

どうして？

どうして私をやるの？

期待させるようなこと…しないでほしい。

私はあなたを愛してしまった。

罪なことをしてしまった。

でも、これは、チャンスかもれない。

もし、あなたが私のことを愛しているなら、
私と両想いならば、私は幸せになる。

だつて… そうでしょう？

好きでもない奴を守る？

好きでもない奴を助ける？

私だったらそんなことしない。

でも… 私は本当に罪びとである。

彼をずっと待ち続けていた、蘭さんから取ってしまった。

きっと私と彼は両想い。

でも…蘭さんの幸せはどう??

蘭さんはずっと暗闇にいることになる。

彼といつ希望を私がとってしまったら…。

あほりしい。

そんなの、蘭さんは強いから平氣よ。

彼がいなくたって、彼女はきっといい人を見つける。
彼氏

そうでしょう?・蘭さん。

「新一いー。」

あら、蘭さん。

私の彼氏に手を出すなんて…。

「なんだあー蘭！！」

あらら、どうしたえるのよー。

「今日、買い物に付き合ってくれる?」

「ああ、いいぜ！」

「よかつたあ！最近通り魔が多いからさ……。」

「ああ……蘭、気をつけろよ？その犯人、そつと目的^{ターゲット}に忍び寄り、気付かれぬままナイフを女性の腹を突き刺すんだってさ。」

「しかも、女性ばかり。いやだなあ……」

どうして？

どうして蘭さんの心配ばかり…

私の好きな人、それは工藤新一。

名探偵の工藤新一。

優しい工藤新一。

私のもの…。

彼は…私のもの。

「志保さん！」

「あら、蘭さん。」

「今日、買い物行かない？」

「行かない？って……あなた知ってるでしょ？通り魔のこと。私はそんな危険なこと……」

ちょっと待つて。

もし狙われるといふと、せっかく藤君が助けてくれるはず……！

「いいえ、行くわ！あなたが狙われたらいけないものね！」

調子よく言った私。

うふふ……

「じゃあ、放課後……！」

蘭さんの声とともに、チャイムが鳴る。

授業中はいつも寝て居る彼。
私も眠い……。

あ……もう限界……。

「……やん……？」

え
…
？

「… もれんー…? ?」

誰
よ…

「… もれんー? ?」

誰
なのよ… あなた… ! !

いやあああ… ! !

「志保さん……！」

ハツと我に帰つた時、私は放課後の教室にいた。教室にいるのは私と、蘭さんと…工藤君だった。

私を待つてくれたのね…。

「蘭さん、行きましょう?」

蘭さんの手を引くとともに、工藤君に視線を向ける。
あ、じつちを見てる…。

いいえ…あれは私に見ているんじゃない！！

蘭さんを見ていた。・・・。

優しい、穏やかな笑顔で

第一章

「蘭！ 蘭つ！ …… 蘭つ！ ……」

「ら・・・ん…さん…」

ピーポーピーポー

「お前を逮捕する！－！」

男女の大声が道路に血まみれで横たわっている女子に呼びかけている。

その女子は帝丹高校二年、毛利蘭だった。

呼びかけている女は驚きで何も言えない…。

男は一生懸命汗を流すまで大きな声で呼びかけた。

「誰か、付き添ってくれる人はいませんかあ！？」

救急車の人々が人々に呼びかけている。

蘭を救急車に乗せた。

「俺、行きます！」

「わかりました、では、乗ってください。」

新一は素早く乗ると、研究者、医者の富野志保は救急車が出発するのを見届けた。

なぜ

蘭がこうなつてしまつたのか

それは、今から32分15秒前

ここから、志保目線で説明します。

「えーと…」「れと…」「れと…」

蘭さんが傷のなさそうな野菜を一生懸命選んでいる。
どうやら今夜はカレーらしい。

しかも、三人分取っている…。

蘭さんと、蘭さんのお父さんといつことはわかるけど
あともう一人は誰かしら?

「新一、サラダ食べる?」

さつきから蘭さんは工藤君に質問。

私はそんな景色を見て、こう推理した。

あともう一人は…

工藤君だと…。

工藤君は嬉しそうに答えてくる。

あいとそりゃ。

私という人がいるのに…。

「どうして…？どうしてなの？」

「蘭さん、私、外に出てるわね。」

「え…志保さん、どうかした？」

「ちょっと気分が悪くて。それじゃあ、待ってるわ。」

「ううん…」

私はスーパーのそばにある、公園のベンチに座っていた。
ぼんやり空を見ていると、雲の影から、月が私を照らした。
こんな月、工藤君と見られたらいいのに…。
ロマンチックなのに…。

「キヤアア―――ッ」

ハツ…

何？今の悲鳴…！！

私はあたりを見回す…

そこにいたのは、腕を抑えた、ポニーテールの30歳ぐらいの女性
と、その場を逃げ去る、犯人らしき人が血まみれの果物ナイフを持
つてこっちへ向かってくる…！！

「はああ…！…どけ、その女…！」
「い…イヤアアアアアアアアア…！」

私が悲鳴を上げた・・・
目をつぶつて痛みを感じ
てない・・・？

今・・・ナイフが突き刺さった音がしたはず・・・！――

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤツ」

犯人だつて・・・笑つてるじゃない・・・！――
私死んでるの？

そつとそつと目を開けた・・・。

そこにはいるのは・・・黒髪で私が憎んでいた・・・

蘭さんだつた・・・。

「富野……救急車は？」

「ぐ、工藤君……？」

私が戻つてくると工藤君が蘭を抱き上げていた。
哀しそうな、憎しみのこもった顔で私を睨みつける……。

工藤君に文句言われる……

「だいじょうぶ……警察呼んだから……」
「救急車、呼んでくるわ！」

私はその場から逃げたかった。

私のせいにされる……

蘭さんのおなかから大量に血が出ていた。

「う、蘭さん……！？」
「だい……じょうぶ？ けが……ない？」

そ、そんなことより……あなたのほうが……っ……

「あ、あと一分ぐらいで…」

「せうか…つ蘭つ…!!…しつかりしそよー蘭…!!…」

れつわよつ血が…たくさん出でる…!!

「う…う…ん…ん…ん…」

どひこもならなかつた。

どひこも…

救急車がくると、蘭さんはタンカに乗せられ、工藤君は付き添つて
いった。

私はただ…見守るしかなかつた。

哀しい顔をしていことは…私にもわかつた。

そのひ、蘭さんを襲つた通り魔は無事、逮捕された。

「蘭さん…」

そつと呟いた時、私の田から涙が出てきた…。

その時、どこからか、声が聞こえてきた。

「あのひとよ、あの人。さつきのかわいい子がかばつたのよ…!!お
礼も言わないで…つもしかしたら、さつきのかわいい子をたてにし

たんじやないー!?

「最低ー!」

「本当にねー?」

違うの!…蘭さんが勝手に…
でも…お礼も何も言つてない…。

蘭さん…
蘭さん…

「メンナサイ…

そして…

ありがとう

私は急いで米花総合病院に向かつた

第一章（後書き）

蘭…どうなるの…?

第三章（前書き）

蘭田線です！

第三章

私…どうして元気なんだね？

真っ暗な世界…

暗黒な世界…

そんな感じがする。

真っ暗で何も見えない…！

怖い…いや…

私…何があつたんだね？

確か…確か…

私…志保さんをかばつて…かばつて…

そう…通り魔に刺されちゃったんだ…

ちょうど買い物が終わつたから公園に行つたら、志保さんが襲われ
そうになつていたから…なぜか、体が動いていた。

そのあとのこと覚えていない…。

かすかに新一の声が聞こえた。

一生懸命私を呼んでくれた。それだけでうれしかつた…新一が私を
呼んでくれているだけでうれしいよ…。

もし…私が死んじゃつたら…志保さんと幸せになつてね…新一…。

そう、知つてた…志保さんは新一のことが好きだつて。

きっと新一も志保さんが好き。

でも・・私は新一がずっと好きだった‥。

その時、志保さんが通り魔に襲われそうになっていた‥。

志保さんが死んでしまったら、新一の幸せはどこへ行くの?

そう思つたとたん、私は志保さんを庇つていた。新一の幸せのため、志保さんの幸せのため、そして、私の幸せのため。

新一が幸せなら…私も十分に幸せです‥。

新
—
：

ハツ・・・

聞こえた…蘭の声が聞こえた…！

俺は、蘭を助けてやることができなかつた。

蘭と幼馴染の俺が…

蘭を昔から愛していいる俺は…守ることができなかつた。
蘭を守ることができなかつた。

まさにスロー・モーションだつた。

でも、そのスロー・モーションに俺はついていくことができなかつた。
蘭は命を張つて宮野を守つた。

俺は…そんなことできなかつた。
どうしてだ？

探偵であるこの俺が…一人の女の子に負けるなんて…

そんなのどうでもいい！
とにかく……蘭が助かるまで……
俺は……戦い続ける……！

志保をひとさせになつてね……

何言ってんだよ……俺は……蘭が好きなんだぞ？！

蘭……！

まさか……

俺は急いで蘭のいる病室へ向かった。

「蘭！蘭！！」

え……？

一生懸命呼びかける。

付添いの宮野が驚いたような顔をしている。

「工藤君！何を……！」

「蘭！……蘭つ……！」

「工藤君！」

宮野の声なんか俺の耳には届いていなかつた。
それよりも、蘭の言葉が聞きたくて……蘭の瞳が見たくて……たまらなかつた。

あ……動いた……

蘭の指がかすかに動いたのが、おれも、宮野も分かつた。

「蘭！？蘭！？！」

「…」

蘭の瞳がかすかに見えた…。

きれいなすんだ瞳が俺に見えた…。

きれいに丸く開いた瞳は…どこかわからないようなどこか、遠くを見ているような目だつた。

「富野！先生を呼んで来い！」

「ええ！！」

宮野が走っていく。

「蘭！目が覚めたんだな！」

「…」

「蘭…？どうかしたか…？」

蘭の返事がない…。

蘭の返事が…ない…

どうかしたのか？

蘭
…?

「あなたは誰…？私は…蘭つていうんですか…？」

第三章（後書き）

蘭！？どうかしたのかあああ！…？
つてオーバーな私です…！
感想待つてます！

第四章

「あなたは誰……？私は……蘭つていうんですか……？」

衝撃の言葉が、工藤君に襲いかかる。

私がそれを聞いたのが、先生を病室に急いで連れてきて、ドアを開けた瞬間だった。

「う・・・ん？」

工藤君はもう失神寸前のよくな田で蘭さんを見つめていた。

「あの……だから……私は……？」

蘭さんは……

記憶喪失になっていた……

なぜ……なぜ?

どうして……?

私をかばつたことがそんなにショックだったの?

私……私がいけないの?

蘭さん……何とか言ひてよお……!

「毛利さんの、」両親は？」「

先生が工藤君に話しかける。

でも、私が答えた。

今の彼に、どんな声をかけたって彼の耳には届きはしない。たとえ私でも、蘭さんでない限り……

「今日、来るはずです……」

「そりか……西野……さん、ちよつと別室に来てください。」「

「わかりました。」

蘭さんのことで、先生とよく話した。

「それで？ 蘭さんはどうなったの？」

「あなたも医者でしょ？ わかるはずです。」

「いいから答えなさい……」蘭さんは……どうなってしまったの……？

「……記憶……喪失です……」

「記憶……喪失……」

心の中ではもしかしたらと思つていた……

でも……本当にそうとは思わなかつた。

私は重い足で、工藤君を呼びに行つた。

「工藤…」

工藤君と言おうとしたとき、工藤君は蘭さんを抱きしめていた。蘭さんは驚いたような顔つきで工藤君を見ていた。見てはいけないようなものを見てしまった。

「あ…あの…？」

「あら…やだ…工藤君？ 何を…」

「蘭…」

私の声が届いていない…

彼の耳には蘭さんの声しか届いていない…

「あ、あの…だから…私は誰なんですか？あなたはいつたい誰なんですか？」

「わかりません…」

「そ…そ…か…」

工藤君は非常に残念そうに言ひ…。

「工藤君…よく聞いて…今からいづれもすくべ傷つくかもしれな

い…！」

「知ってる…蘭は…記憶喪失なんだろ？」

「…そうよ…しかも…もしかしたら、もう」のまま記憶喪失のままになってしまふかも…知れないの…！」

「…！…！」

私の言葉に工藤君は目を見開き、驚いた様子だった。

「蘭さんが元に戻る可能性は… 11%…」

たつた11%の確率…

いくら蘭さんだって… どうなるかわからない…！

「蘭さん…あなたの名前は毛利蘭と言つて…」

「蘭…毛利蘭…」

「そう…空手を習つていたわ…。すゞくカツコよくて、関東大会、東日本大会で高校一年の部に優勝したわ…！」

「東日本大会…優勝…？」

「そう…蘭さんはすゞくうれしがつていたわ…」

「…本当?」

「ええ！」

「そう…」

どこか悲しげの蘭さん…そんな思い出をなくしてしまったことが…彼女を苦しめているのね…

「あなたに抱き着いた変態のこの人が、工藤新一…」

「工藤…新一…？」

ピクン

あ…蘭さんがかすかに揺れる…

「覚えがあるの！？」

「いいえ…でも…すゞぐ暖かい感じがするの…でも…でも…何かさ
びしい。私…あなたの気持ちがわかる…」

「え…？何を言つてゐるの？」

「名前は…？」

「富野…志保よ？」

「富野さん…ちよつと…」

蘭さんに惹かれて、病院の隅で、蘭さんが話した。

「あなたは…その…工藤さんが好きなのね…」

「…」

「私、わかつた。私は、記憶喪失になる前に、工藤さんが好きだつ
たのね…でも…あなたたちがいたから、わたしはあきらめたのだと
思うわ…それから…覚えが…」

そういうふたとたん、蘭さんは倒れてしまつた。

「蘭さん…！」

私は急いで軽い彼女を抱いて病室へと連れて行つた。

工藤君はもう、病室にはいなかつた。

先生が蘭さんを見てくださつている。

私はその時、工藤君を探してゐた。不意に、夕日がきれいになる土
手を見てみた。

そこには、私の愛しい彼がいた。

「工藤君…」

私は静かに彼の横に座つた。

彼はぼんやり空を見ていた…。そんな彼がかわいそうに思えた…

「工藤君…」

もう一度呼びかける…。

応答はない。

仕方ない……。

それなり……告白ついてしまおう……

これで……彼の傷を……癒してあげたい……

「工藤君、私、あなたのこと�이好きよ~」

「…?」

ピクン

私のほうを見た。

「好き……あなたが好き……」の気持ちちは……蘭さんより強いわ……ねえ……工藤君……私と付き合つて……やつしたら……蘭さんといふ傷から……抜け出せめるわ……」

「富野……俺……」

第四章（後書き）

どういたえるか、新一君！！

第五章

「富野……俺……」

無理……だ……」

やつぱり……ね……

でも……やつぱり悪いわ……。

本当に口から伝えられるのはね……
ねえ……最後だけ……最後だけ……
最後だけわがままいいかな……？

私はそつと……そつと彼にやせこべ抱きついた……。
きっとあなたは驚いたことでしょう……でも……

最後のわがまだから……お願ひ……！

私を包んで……お願い……

「富野……」

「お願い……っ！私を抱いて……！……私の……最後の……最後のわがままだからあ……！」

私は涙が止まらなかつた。

そして……彼は優しく私を抱いてくれた……。

あたたかいあなたのむね……。

大好きだつたあなたの胸……。

今でも……この先も……あなたを愛しています……

私は静かに離れると、「だいすき」と耳打ちしながら家に帰つて行つた。

蘭さん、ごめんなさいね……私、彼をもううわ……。
あなたには……まけやしない……！

「蘭さん……私……」

誓つわ……あなたを超えて見せる……！
あなたから……工藤君を取つて見せる……

その時だつた。私の考えに……何かが横ぎつた……。

何……なんだろ？……！？

トウルルルル
トウルルルル

私は急いで受話器を取つた。

「はい、阿笠または富野です。」

「俺だ、工藤。」

「

「あら……どうかした？」

私……胸が熱く……

蘭の声が聞こえたんだ……」

「え……？」

「富野と幸せになってくれって……」

「……ちよつと……それって……」

「もしかしたら……蘭は自分から記憶喪失になつたんじゃないかな？演技していない、本当にそう思つたから……蘭は自分を捨てたんじゃないかな？」

「から……」

「……俺も……好き……蘭のこと……愛してる……」

「……！」

「聞きたくない………聞きたくない……！」

蘭さん……蘭さんの……バカアアアアアアアアア

「あなたたち両想いだつたのね……」

「ああ……そうみたいだな……」

うれしそうな声して……

蘭さん……私……あなたに悪いこと思つてたみたいね……。

蘭さん、確かに私は彼のこと好きよ？

でも……

私はもういいの。

蘭さん……あなたに譲るわ……。

私は……あなたたちを見守るわね……。

頑張つて……蘭さん……！

Farewell,
Snichidi,
my first love.
.

第五章（後書き）

最後のは、新一、大好きでした。
さようなら、私の初恋。
です！

最後だけ、新一と呼び捨てにさせたこと、新蘭ファン、ごめんなさい！
感想お待ちしています！

第六章

蘭さんが記憶喪失になつて、はや一ヶ月が好きた。

相変わらず一藤君は蘭さんにつきつきり。

蘭さんは、一藤君と一緒にいるときだけ、笑顔を見せる。

最近渡しといても笑顔を見るよつになつた。

特に、園子さんなんか、ケラケラ笑つている。

「蘭ちゃん、最近明るくなつたわね。」

「せやね！ 蘭ちゃん、明るくなつてほんまうれしいわあ……」

和葉さんがホット胸をなでおろす。

私もなでおろしたい氣持である。

「蘭ちゃん！！今日、ショッピングいかへん！？」

「うん！ 行く！」

蘭さんは以前よりも「ぐぐ明るくなつていた。

私は、それだけでうれしかつた。

蘭さん… 蘭さん… 蘭さん…

ああ… 蘭さん… あなたはすべてを失つてしまつたのね…
愛も、友情も…

「これ、いいわね…」

「蘭ちゃん、これええんと…」

和葉さんの声が止まつた。

「和葉さん？」

「お、おらん…」

「え…？」

「おらんのや…蘭ちゃんがおらへんで…？」

「…？」

蘭さんが…いなくなつた…！？

ありえないわ…

蘭さんなら、記憶喪失になつている人間がどこかへ行つてしまふな
んて…！！

連れ去られた…！？

ゆ、誘拐！？

「和葉さん…すぐに、工藤くんや、大阪の少年に連絡しましょー！」

「うん！」

一人は急いで探偵たちのもとへ走つて行つた。

すぐそばに老人と蘭がいるとは知らないで…

第七章

蘭は和葉と志保が行くのを見ると、老人とともに、また、どこかへ行つてしまつた。

「ねえ、博士。本当？」

「そうじや、おぬしの記憶はすぐ戻る。」

「阿笠博士つて、本当にすごいね……」

「そうか？」

「工藤さんが言つてた。博士はガラクタばかり作つてゐて。でも、私はそう思いません。」

「よかつた……！」

二人はこんな会話をしていた。

その後、阿笠邸で阿笠博士、「皿櫻の「記憶喪失元に戻しマシーン」を蘭に見せた。

「博士、私、博士のことあんまり知らないけど、ありがとう……！」

「そんじや、このヘルメットを、かぶつて。」

「うん……」

蘭はヘルメットをかぶると、少し悲しげな様子で博士を見つめた。

「どうした？」

「わからないの……」

「へ？」

「本当に戻つていいのか、私、記憶がある前に、何か悲しい記憶が残つてゐる。すごく、切なくて、悲しくて……私、戻らないほうが、幸せなのかもしない。」

「そうか……う……？」

「そりや、工藤さんがたに、いろいろ迷惑をかけてしまつかもしれないけど、私は、そのほうが幸せだと思うの。」

蘭の言葉に博士は何も言えなかつた。

「あ、こめん博士。」

「いいんじゃ。やめても構わんぞ？」

「でも…」

「いいぞ。わしは、その日を待つてる。蘭君が決心した日をな…」
博士はそういうと、蘭を毛利探偵事務所まで送つていった。
そこには、みんなが蘭を待つていた。蘭が入つていくと、和葉、園
子、青子が蘭に抱き着いてきた。

「園子さん…？和葉さん？青子さん？」

「ばかあ…どこにいたのよお…！」

「ごめん…なさい…」

蘭はこんなに自分を待つていてくれた人がいるつてことを知つて泣
いていた。

自分はすぐ幸せだということが分かつた。

「博士と一緒にいたの。」

「そつか…蘭、無断でどこか行つちゃダメじゃない…！あ、新一君
たち…！！！」

そう、新一ひとりだけ、蘭を探しに行つた。ほかのみんなは大氣と
いうことになつたが、新一は、真つ暗の中を一生懸命探していた。

「私、行つてきます！」

蘭が突然言い出した。

「駄目よ、蘭さん！あなたは記憶喪失なのよ…？」

「でも、私が勝手なことをしたからこうなつたんですね！私が探しに
行きます！」

蘭はそう言い残すと、走つて外に向かつた。
みんな止める暇さえなかつた。

蘭は一生懸命新一を探す。自分に責任を感じながら。

「よおねえちゃん…」

いきなり話しかけられた蘭は、ビクついて何も言えなかつた。

「君一人?一緒に遊ばない?」

「ひ、一人ですけど…」

「なら一緒に遊ぼうぜ?」

「で、でも、人を探してるんです!」

「なら、俺と一緒に探そうぜ!?」

「わ、私一人で…」

「いいからいいから!」

蘭は男の人に、腕をつかまれ、動けない状態になつていた。
どうすることもできず、怖くて目をつぶつっていた蘭。
その時だつた。

「おー…蘭…!!」

ゼ」からか、自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ク、工藤さん……？」

腕をつかまれた蘭は、声を出すだけで精いっぱいだった。
「おい、蘭、何して……」
新一は、男に気が付くと、怖い顔をして、
「あなた誰ですか？」
と聞いた。

「この子がだれか探してんんだってさ……」

「誰だ、蘭。」

「ク、工藤さんです……！私をまだ探してんじゃなかつて……！」

「お、お前、一回帰つたのか？」

「は、はい……！」

蘭の答えにより、新一はほっとしたように、顔を赤くした。

「それより、なら、彼女、遊ぼうよ……」

「あ、でも……！」

「あん？」

男は、いきなり怖くなつて、今にも蘭を殴りつけた。
しかし、そばに新一がいる。

「おい蘭。家に帰るぞ？」

新一が蘭を引つ張つていく。蘭は体が動くままについていった。
つまり、男を置いて行つたということになる……

男はぽつんと一人になつてしまい、どうすることもなかつた。

家に帰ると、みんな蘭と新一を待っていたかのような顔をして、毛利探偵事務所はドンチャン騒ぎになつた。

第七章（後書き）

今日はこれでおしまいです！
感想待っています！

第八章

「え……？ 新一……？」

「そり……新一って呼んで。」

いきなり告げられた。工藤さんは真剣なまなざしで私を見つめる。
どうして？

どうしてそんな顔をして私に言つたの？
富野さんと付き合つているんでしょう？
私には理解できない。

「でも、私は記憶がないんです。それに、あなたには、彼女がいる
のでは？」

「いねーつて。」

「なら、好きな人ぐらい……」

「…」

いきなり黙つた。どうして？
どうして黙りこくつてしまふの？
答えて……答えてください……

「教えてください……。私は記憶がない……だから、何も知らないんで
す……」

私がそう言葉を発した時、工藤さんは、うつむきながらコクンとう
なづいた。

「いるん……ですね？」

「あ……」

「その人は…あなたにとつてかけがえのない人なのですね…なら、
私は新一とは呼べません。」

私がそういうと、上藤さんは目をかっと開いた。

「そんなことない！蘭！俺は…俺は…！…！」

「……藤也……？」

「藤也さんが何が言おうとしているのかためらつてこない」

「ハハハンッ

あ……誰か来た……

「蘭也ん？あ、藤君……どうかしたの？」

宮野さんが入ってきた。

工藤さんの好きな人…宮野さん…
どうしてだらう…?

宮野さんがいると、心が苦しくなっていく。

「蘭さん、寝ていたほうがいいわ。」

「ええ、ごめんね、工藤さん。宮野さんも。それじゃあ…」

まるで病人。私はすぐにベットの中へ入った。

最近、38度の熱が出る。

苦しい…私…どうなつてしまつたのだろう?

私は…何も覚えていない…本当の毛利蘭は…

一度死んでしまった。
。

工藤さんたちの話によると、私は通り魔によつて刺され、記憶をなくしたと……。

思い出をつとすると、頭が割れるよつて痛い……。

富野さん……あなたをかばつたのね……私……。

富野さんが……生きていてよかつたと思つて……

工藤さんは、とても優しい方。富野さんが、死んだり、記憶を失つてしまつたら、すぐ悲しんで、苦しむでしょうね……。

私……私でよかつた……。

私は……工藤さんの心を奪いたくない……

心を失わせたくない……

そう思つたから……守つたんでしょうね……

記憶を失う前に……本当の私の声が聞こえた……。

『志保さんと...新一を...幸せにして...私はもう...平気だから...あなたは...新一から手を引くのよ...?』

これは…私が記憶をなくした理由?

そつか…富野さんと工藤さんの邪魔になるから…
自分から身を引いたのね…。

それで…新しい毛利蘭を作つたのね…。

工藤さん…富野さん…幸せになつてください…

本当の毛利蘭からMessaageです。

私を置いて…私は…リセッシュます…。新しい…恋を見つけてます…。
あなたたちに…初恋を置いていきます…。

きっと私は工藤さんのことが好きなんです…。
今も、前も…。

毛利蘭は

一度死に

一度
・

生き返りました
・
・
・。

第八章（後書き）

なんか、間がたくさんありますね！
感想待っています！

鈴蘭

第九章

「ねえ、蘭…死んでるの…？」

園子の心配そうな声が、作戦会議場となつてゐる、上藤邸に響き渡る。その声に、一回はすつと黙つてしまつ。

今は、何も言へることはない。

「私…いやだよ…」

園子の一喝の発言で、上藤邸に集まつている、新一、志保、平次、和葉、快斗、青子がハッとした顔を向いた。

「何が…？」

志保の問いに園子は今にも泣きそうな顔をして

「蘭…が…死んじやうの…」

「…そんな…」

園子は目に涙をいっぱいためて、みんなを見つめる。

「なんで、蘭ちゃんが死ななかんねん！」

和葉も涙をためて言つ。蘭はみんなに好かれている。

だからこそ、みんな心配して、みんな怖がる。

「最近、蘭さんは熱を出しているわ…。病気ではないと思つ。」

「どないして、どないしてそないなこと言えるん！？」

和葉はもつ怒るしかなかった。

「たぶん、心の病氣よ。」

「…どうこいつ」と、「

「蘭さんは何かのことで悩んでいるわ。もしかしたら…記憶喪失のことにつながるかもしないけど…。」

志保の言葉に、一回は蘭が何に悩んでいるのか突き止めようと、すぐには一致団結した。

そして、作戦を練る。

「蘭さんにこわいげなく聞くのよ~。」

「わかったで!」

特に女子は蘭のことがだから、一生懸命。

ところで、新一はどこか、蘭につきつきつ。

「蘭…ごめんな…」

新一は、謝る」としかできない自分に腹を立てていた。

蘭はそんなことも知らずに、スヤスヤと眠っていた。

本当の蘭の瞳はもう、開けられないのだろうか？

今、記憶喪失になっている蘭が目を開けたって、前の蘭の瞳は瞳に映つていない。

一同が知っている蘭の瞳は輝いて、きらめいてみんなを吸い込んでしまいそうなウルウルの瞳だ。

素直で優しい本当の蘭はどこへ行ってしまったのだろうか？

一同はそう思つてゐる…。

「なあ蘭ちゃん」

「ん? なあ」「?」

蘭が目を覚ますと和葉がにっこりしながら話しかけてきた。
これも作戦のうち。

「蘭ちゃん、何か悩んでるやつ?」

「え...」

図星を突かれたかのよつに蘭は驚いた。

「やつぱつなあ...」

「じつしてわかつたんですか?」

「見ればわかるで。」

和葉の言葉に蘭は少しご立派とした。久しごとに見るよつな顔だった。

「やつぱつなあ...」

「記憶喪失になる前なんですか…」

その時、和葉はそつと録音テープをしのばせ、録音ボタンを押した。

「本当の私が言つたんです。」

「なんて？」

「富野さんと藤さんを幸せにして…リセットしていく…」

蘭は悲しい顔をする。

「あたし…何もできへんけど…」

和葉は蘭の手を包むように握った。

「和葉さん？」

「あたしなあ、平次のことがずっと好きやったんや…。
好きで好きで…」

「和葉さん…」

「でも、平次は鈍感やから…。」

「私…どうしてもわからないことがあります。工藤さんは私のこと新一と呼んでくれと言います。
どうしてですか？」

真実を話す…

「蘭ちゃん…それはな…
和葉が…」

第九章（後書き）

感想待つてます。

第十話

「…それはな、工藤君は蘭ちゃんのことが好きやつた…。」
「…？」

和葉の言葉に蘭は驚きを隠せない様子だった。

「蘭ちゃんも好きやつたん。2人は両想いやのに、2人して片思い思つてんのや。そないなことみんなで見とつたら、おかしゅうてかなわんわあ。」

思い出すような眼で和葉は天井に目を向けた。

ここは、工藤邸。

大きな部屋に立派な床。立派な天井。

どれもこれも立派すぎる。

「蘭ちゃん…あせらなくともええ。なにか、思い当たること…いつてくれへんか？」

「わざわざ言つたよこの…もともとの私が言つたんです…だから…富野さんは工藤さんのことが好き。

もし、私と工藤さんが付き合つたり、富野さんの心はビック？暗い闇の中をさまよう羽目になります…。そんなの…かわいそうすぎます…。そして、もともとの私は、リセットしてと言つました…。リセットすれば、富野さんは闇から、心は救われます。きっと、工藤さんもそれを願つていると思います。」

蘭は悲しそうな瞳で話す。そんな蘭を見るだけで、和葉はすぐ傷ついた。

「蘭ちゃん…あたし…野川さんやばい、やひ、蘭ちゃんの勘違いやと思ひ。」

「え…？」

「蘭ちゃん、もし、志保さんと工藤君が女を呑んだり、蘭ちゃんの心はどうに行つてしまつ？』

蘭ちゃんやで、闇に行つてしまひよ。」

「和葉さん…」

蘭は驚いたような、哀しいような瞳で和葉を見つめる。

「蘭ちゃん、あたしは蘭ちゃんと工藤君が結ばれてほしい。わい、待つて…今、志保さん呼んでくるから…」

和葉はそのまま残すと走つて志保のいるリビングに向かった。

和葉はリビングに着くと、志保の声と新一の声が耳に入った。何の話だらうと和葉はそのまま耳を立ててドアに貼りついた。

『工藤君…「めんなさいね…』

『闇野…』

『わいと蘭さんが記憶喪失になつたのは私のせいなの。』

『闇野…』

『蘭さんを苦しめていたのは私。私は工藤君のことが好き。今はもういいの。でも、そのせいで蘭さんはすぐ傷ついた。蘭さんにはわかつっていたのよ…。私の気持ちがね…。』

『みたいだな……』

『蘭さんを幸せにしてね、工藤君。』

志保はやつまく終わると、アドリアからロビングを出した。

「こ、志保さん……」

和葉が出て行くと、志保を呼び止めた。

「和葉さん……」

「志保さん、今の話……」

「聞いていたのね……」

志保は悲しそうな顔をして和葉を見る。
和葉はどうしても許せなかつた。

蘭をこんな目にあわせた志保が……。

「何ですか……」

「え……？」

「何でやー蘭ちゃんの気持ち知つとつたら、なんで諦めへんかっ

た！？蘭ちゃんがどんなだけ苦しむかわかつてやつてんの！？あたし
：志保さんのこと一生恨むで？あなたのこと殺したいぐらいにな！」
和葉はやつこいつとの場から立ち去った。

志保は和葉の言葉によつ、その場に崩れ落ちた。

自分はなんて「」としてしまつたんだろう？

一度は蘭さんを見下していた・・・。
一度は蘭さんを恨んでいた・・・。
一度は蘭さんを憎んでいた・・・。
一度は蘭さんを睨んでいた・・・。
一度は蘭さんを無視していた・・・。

「んな罪びとが…

許されるはずがない……

『メンハサイ・・・・メンハサイ・・・・

謝つても謝つても謝りきれないこの恋葉…。

蘭さん… 蘭さん…

本当に…

ゴメンナサイ…！

だから……元の蘭さんに戻つてください……っ

私たちの……

本当の蘭さんに戻つてください……っ

蘭さん……っ

第十話（後書き）

ちょっと志保ちゃんがかわいそつな場面です。
感想等お待ちしています！

第十一章

許さへん
許さへん

思つてもみなかつた

蘭ちゃんの友達言つてゐる志保さん

志保さんのせいで蘭ちゃんの記憶が失われる

ありえへん……そつと思つてた……なのにや……？
なので。

信用しどつた志保さんのせいで蘭ちゃんを地獄へ送つたんや

あたしは怖い顔をして、蘭ちゃんが待つ部屋へ向かつていた。
確かに工藤邸は広い。

でも、今のあたしにはそないなことどーでもよかつた。
ただ、志保さんを許すことができんてめつちや怒つてた

途中、あたしの大好きな平次に会つた。
平次は二カツと白い歯を見せて、あたしに話しかけた。

「おひ、和葉。何怖い顔してんねん。」

「あんたには関係ありへんわ。」

平次は悪くない。

なのに、いりこらしとるあたしは口が勝手に動いた。

「何やねん。人がせつかく心配しこむひやーの」「…」

心配しどつた・・・?

ほんまに…?

「平次…すまへん。あたしちよつとイライラしててな…」

「和葉…?」「

平次はやせじゅうひでかなわん。

いつもはあたしをからかうの、いつこうしがだけ優しくんや…。

ずるいで…?

「そんでな、蘭ちゃんが記憶喪失になつたんは、志保さんのせいや
て…。」

「そか…」

「そんだけ?」

「せやなあ…しゃあないやんけ。」

「はあ?」

平次は…

あの畠野志保に味方するん?

「いひなつてしまつたんは畠野つちゅー姉ちゃんのせいかもしれへん
けど…それはそれでしゃあないことやんけ。」

「平次…あんた…志保さんの」と…」

「あん?」

「好きなん?」

「ほく?」

平次：おかしい…

あんなに志保さん味方するなんて…

ありえへん…ありえへんよ…

「 もうな…」

「 ……？」

あたしはその場から消えたかった。

むしり、蘭ちゃんと同じ、記憶喪失になつといひ、しゃあなかつた。

あたしは、重い足を一生懸命動かして、工藤邸から走って出た。

蘭ちゃんには悪い思うてる。

ごめんな…行けなくてな…

蘭ちゃん…もう一人やないで?

あたしも…あたしも…記憶喪失になつたる…

生きていいたらな…

あたしはそう思い、真っ青な空を見上げて目を閉じ、大きな高いビルの下を向いてそっと前に体を倒した。

そう、それは、スローモーション。

自殺するような女子。

それを止められることができない、クラスメートや友達。

蘭ちゃん…

ひとりやないで？

平次

あんたのせいやけど… 大好きやつたで？

志保さん

…

一生懶んだる

…

工藤君
：

蘭ちゃんと幸せになりい...?

ナラナリ...

みんな
...

第十一章（後書き）

和葉が…和葉が自殺？！
どうなる？和葉あ！

一応、蘭のせいでこうなったと皆さん思われると思いますが、そんなつもりで書いているわけではありませんので、蘭を見捨てないで
くださいね～（^_^）
感想待つてます！

第十一章

ドサッ！！！

大きな音がビルのそばに響き渡る。

ボーネルをした少女が目を閉じて頭から血を流して倒れていた。

町にひきわたる」の悲鳴

周りの人は急いで救急車や
警察を呼んだ

新一と平次は当然のごとく、日暮警部に呼ばれていた。

の乗せられた救急車を見送っていた。

「あ……いやね……たぶん、飛び降り自殺だと思うんだが……その、自殺しようとした少女がね、彼女なんだよ……」「

- 彼女？

新一と平次は嫌な予感がした。

特に平次は大切なものの、大切な宝物が壊れてしまいそうな嫌な予感がした。

「JRの子だ…」

写真の中からすると、とても高いところから飛び降りたのか、血がたくさん飛び散つていて、頭から染まる様子もないぐらに血が出ていた。

それよりも、2人がとても気になつたのは、自殺した少女だった。

黒髪のポニーテールをした髪の毛に、白い肌、それはまぎれもなく、遠山和葉だった。

「か……和葉……？」

平次は驚きを隠せない様子でしゃべる。

新一も驚きでいっぱいだった。

「警部ハン……和葉は……どこの病院行つた……？」「へ……？」

「どこの行つたかきいてんねん！……」

怒鳴る平次に警部は

「べ、米花総合病院……」

「そか……！」

平次はタクシーを使わずに直行して病院へと向かった。新一はタクシーを使っていつたが…

平次が病院に着いた時には、蘭、志保、青子、快斗、新一が手術室前に立つていたり、座つていたりしていた。

「遅かつたじゃない」

平次が来たのを志保が見つけると、冷たい声で言った。

「ハアハア……ハアハア……か、和葉は？」

「このことおりよ。」

志保が手術室を見なさいとも言つようにその場から一歩下がった。

「そか……」

平次は悲しそうな、残念そうな顔をしてうつむいた。

「服部さん……？」

蘭は平次に近づいた。

「おお……探偵事務所の姉ちゃん……」

「和葉さん……はきっと大丈夫です……」

「……姉ちゃん……」

「私……和葉さんにたくさんのこと教えてもらいました……。優しい方です……そんな人が死ぬはずありません……。」

蘭はやさしい声で平次に言つ。

新一も、快斗も青子も志保も穏やかな顔で一人を見ていた。

パツ……

急に手術中といづらンプが消えた。
一同はハツとして手術室を見上げる。

中から、緑色のエプロンみたいなものを着た人が、一同に笑顔で話しかける。

「大丈夫ですよ、手術は成功しました。」

「やつた…！」

「きやあーー！」

「おっしー！」

「ほ、ほんまか…？」

「よかつた…！」

一同は感動であふれていた。

しかし、

次の言葉により、感動の色は一気になくなる…。

「しかし…

遠山さんさ…

記憶喪失になつてゐる可能性があります…。

」

キオクソウシツ二ナツテイルノガ
・
・

フタリニナツタ
・
・

第十一章（後書き）

とうとうなつてしましました、和葉ちゃん！
感想待ってます！

第十三章

遠山和葉と書かれた病室に和葉は眠っていた。和葉のいる病室前には平次、快斗、青子、蘭、新一が立っていた。
どう、入つていいのか分からなかつた。
たしかに、蘭が記憶喪失になつてゐるから、扱いはなれていのつたりだつたが、和葉の場合はわからない。

「蘭さん？」

蘭は足も、手もすべてが震えていた。

それに、一同は気がついて、すぐ心配している。

「あ……いや……何でもありません……。ただ……私が……行けない……よう……な……気が……して……」

蘭の言葉がどきれどきれになつていく。

「蘭ちゃん！」

「蘭さん……！」

「らあん……！」

その瞬間、蘭はドタッと音を立てながらその場に崩れるよひに倒れた。

「和葉ちゃん」

最後につぶやいた言葉は本当の、元の蘭の口調だった。

「蘭！蘭つ！－蘭、おい、しつかりしろ－蘭－！－！－！－！」

その時、蘭の意識はなくなつた。
蘭は長い夢のような道をどつていゐ……

「……………」

蘭は暗い道を少しずつまつすぐ進んでいた。

「あなたは……誰？」

まっすぐ進んでいると、やけにいたのせ、蘭やつくりな少女がいた。

「誰……？」

「私の名前は……毛利蘭。」

「

「私と同じ…」

「そう、あなたとおんなじ。あなたの目の前にいる私はあなたの分身でもなんでもないわ…。」

蘭が2人いるのである…。

ちなみに、まっすぐに進んでいた、記憶喪失の蘭はおろしているが、今であつた、そつくりな子が一応、ポニー・テールに縛つているのである。

「あなたは誰ですか…？私とそつくりよ？」

「あなたは、あなたじゃない…。あなたは私なの…。」

「え…？」

「あなたと私は…同一人物。つまり、毛利蘭は一人しかいないわ…。」

「静かに話すポニー・テールの蘭はどこか、優しい元の蘭にしか思えない…。」

「あなたが…記憶喪失の私ね…。」

「え…？ならあなたは…。」

「そう、もともとの私。ほらね…。」

元の蘭は縛っていた髪を下ろし、本当の姿で記憶喪失になつた蘭を見つめた。

「あなたが…私…？私は…あなた…。」

「やうよ…新…どうして…？」

「新…」

「園子も…服部君も…和葉ちゃんも…快斗君も…青子ちゃんも…。」

「園子…服部君…海斗君…青子ちゃん…・・・・・・・・和葉…ちやん…？」

和葉といつ言葉で蘭は肩を震わせる。

「どうしたの？」

「和葉ちゃんが…記憶喪失になつたの…。」

「…。」

「私のせい…私のせい…なの…私が…記憶喪失だから…。」

「…あなたは逃げてる…。」

「え…？」

「そうやって、自分のせい、自分のせいって言つてるだけで、何もしてないじゃない！私はあなた、あなたは私…だから…お願い…自分之力で自分の持つているもので…」

記憶を取り戻して！！」

その言葉に、蘭は道から暗い穴へとおとされた。

悲鳴を上げながら下へ下へと落ちていぐ。

一
蘭
！
！
！
」

「蘭！」

「蘭さん！！」

「麗ちゃん...」

「姉ちゃん！」
「蘭ちゃん！」

「蘭ちゃん……！」

新一、園子、志保、青子、平次、快斗…そして…和葉の順で蘭を呼ぶ声が聞こえてくる…。

「自分の力で自分の持っているもので…

記憶を取り戻して…！」

私の...本当の私
...

蘭は少しづつ目を開けた。

その瞳はどこか懐かしい瞳だった。

「蘭！」

一番最初に新一が蘭の名前を呼んだ。

「蘭……！」

次に園子、そして、志保、青子、平次、快斗と順に蘭の名前を呼ぶ
のだ。

「し……」

新
—
·
·

第十三章（後書き）

さ、記憶を取り戻した！？
感想待つてます！

第十四章

「し……新一……」

「蘭……？」

「蘭が……」

「記憶を……」

「取り戻した……」

「私……なんだか長い夢を見ていたみたい……」

蘭が静かにみんなを見ながらゆっくりと話した。
みんなは驚きでいっぱいだった。

「蘭……記憶は……」

「記憶喪失になつてたんでしょう？私。」

「ああ。」

「記憶喪失だつた私に、元の私がいつ言ったの。『自分の力で記憶を取り戻して』って。」

「蘭……」

「だから私、新一や、みんなに会いたくて…会いたくて仕方なかつた。だから…一生懸命頑張つた…。」

蘭の言葉で一同はよかつたとでも言つよつて安心した顔になつた。
蘭は笑顔でみんなを見つめた。

「そだ、和葉ちゃんなんだけど……」

園子が話を切り出す。

その途端、雰囲気が暗くなる。

蘭はそれを見て、あの夢は本当だつたんだと確信した。
「やっぱつ……そつだつたのね……」

「蘭……」

「記憶喪失……になつたんだつてね、和葉ちゃん。」

「そうよ。私のせいでね。」

「志保さん……？」

志保は悲しそうな笑みを浮かべて蘭に事情を話した。

「志保さんのせいじゃないわ……。」「蘭……ん……？」「そんなの、志保さんのせいじゃないー今は今。私、ちよつと和葉ちゃんにあつてくるー！」

蘭はそう言つなり、走つて和葉の病室へ向かつた。

蘭は思い切りドアを開けると、そこには起き上がりつていた和葉が窓を見ていた。

それはまるで絵のような美しさ。

遠くのほうを見つめる少女。そのそばにいる少女が哀しそうに少女を見つめる。

ああ、何という気持であつただろうか、この一人は……

「和葉ちやん？」

蘭の言葉に、和葉はさつとふりむいた。

「あなたは……誰や？」

「あなたの名前は遠山和葉ちやん……。」

「そか。」

「さう、さうやつて逃げてる……。」

蘭から眼をそらすと和葉に蘭はやしこ声で言った。

「なんやて？』

「あなたは、きっと私のために飛び降りたのね。でも、私はそんなことしてほしくなかつた。』

「何言うてんねん。』

「私も、あなたと同じ記憶喪失になつたからよ。』

「・・・!?

蘭の言葉には和葉は息をのんだ。

「和葉ちゃん、自分の力で…記憶を取り戻してごらん?自分の力でやつてみてよ。私もそうして…記憶を取り戻したから…。」

蘭はそうこうと、病室からそっと出て行った。

「自分の力で…」

和葉は蘭が言つた言葉をずっと繰り返しつぶやいていた。

第十四章（後書き）

感想待つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2121z/>

花開くとき

2011年12月16日21時03分発行